

# 友達と遊ばない子どもの発達 —幼児期児童期の引っ込み思案・非社会性研究の動向—

藤 岡 久 美 子

(大学院教育実践研究科)

山形大学紀要（教育科学）第15巻第4号別刷

平成25年（2013）2月

## 友達と遊ばない子どもの発達 －幼児期児童期の引っ込み思案・非社会性研究の動向－

藤岡 久美子

大学院教育実践研究科

(平成24年10月1日受理)

### 要 旨

本稿は、幼児期・児童期の引っ込み思案に関する最近の研究を概観した。まず、研究で用いられているsocial withdrawal, solitude, shyness, inhibitionなどの用語及び具体的な測定方法から引っ込み思案のとらえ方を整理した。次に、乳児・幼児期の縦断的研究を中心に、乳児期の抑制が幼児期の遊び場面での一人行動に至る道筋に関与する、気質や養育スタイルに関する知見をまとめた。また、幼児期から児童期にわたる長期縦断研究を含む児童期の研究から、引っ込み思案が学校での不適応へとつながる軌跡及びそのつながりに関与する要因について検討した。最後に教育への示唆を述べた。

### 1. はじめに

幼児期における仲間とのやりとりの経験は、社会スキル、他者理解、自己理解、感情のコントロールなどのsocio-emotionalな発達の基礎を形成する上で重要な役割を果たす。また、児童期後期や思春期になるにしたがって、仲間は情緒的サポート源として役割をもつようになり、友人との関わりがないことが孤独感につながる。それゆえ、子どもが仲間とあまり関わらないことが社会性発達のリスク因子となることは、多くの研究で指摘されてきた(Hartup, 1970)。攻撃行動や多動などの外向型の不適応問題に比べて、“social withdrawal (引っ込み思案<sup>1</sup>)”, “shyness (内気さ)”の研究への着手が遅かったことが指摘されているが(e.g., Rubin & Coplan, 2004)、この数十年で、それらが特に内向型の不適応のリスクとなりうることで、発達の様々な段階を対象に明らかにされてきた。それと同時に、“引っ込み思案”には動機(e.g., Coplan, Prakash, O’Neil, & Armer, 2004)や本人が感じる不安(e.g., 千葉・藤岡, 2009)などで多様性があること、すなわち“引っ込み思案”は“a heterogeneous construct”(Rubin & Coplan, 2004)であることが示唆されてきた。概念的な区別だけでなく、実際に子ども達が“引っ込み思案”のサブタイプを見分けている(Coplan, Girardi, Findlay, & Frohlick, 2007)ことも見いだされている。また、縦断的研究の成果により(e.g., Ladd, 2006)、“引っ込み思案”は攻撃性よりも安定的でなく、適応の問題を抱えやすい場合とそれほどではない場合があることが示されてきた。そこ

<sup>1</sup> “social withdrawal”の訳語として幼児期・児童期対象の発達系の研究では、“引っ込み思案”が用いられることが多いが、CBCLの下位尺度social withdrawalなど、一部で、“ひきこもり”とも訳されている。

で、最近の研究の焦点は、どのような“引っ込み思案”が、あるいは“引っ込み思案”の他にどのような特徴が付加されるとシビアな不適應の問題につながるのか、また、“引っ込み思案”を緩和する周囲の状況は何かといった問題を明らかにしようとするところにあると考えられる。本稿はこれをふまえ、主にこの領域における2000年以降の研究を概観することにする<sup>2</sup>。

最初に“引っ込み思案”及びその周辺をあらわす用語と測定方法を整理し、友達と関わらない子どもをどのように捉えて研究が行われているのかを明確にする。次に、縦断的研究を中心に発達初期の“引っ込み思案”の始まりと経過、また学齢になってからの学校での適應を中心に概観する。それらの研究知見から、“引っ込み思案”の防御因子や促進因子を論じ、教育への示唆を考察する。

## 2. “引っ込み思案”を表す言葉と測定方法

辞書的な意味では、“引っ込み思案”は「進んで物事をしたり、人前に出たりする元気に乏しいこと。また、そのような態度や性質」であり、また、“内気”は「引っ込みがちな気質。思ったことを人前で言ったりすることの出来ない性格」(いずれも広辞苑第五版)である。

上述の辞書の意味での“引っ込み思案”と“内気”は、しばしばほぼ同義に用いられる。“social withdrawal”についても同様のことが言える。Rubin & Coplan(2004)によれば、「対人的相互作用の少ない子ども」の初期の研究は、研究者によってsocial withdrawal, isolation, shyness, inhibitionなどの用語が混在し互換的に用いられ、概念や定義の枠組みが曖昧であった。Rubin & Asendorpf (1993)を参考にすると, solitude (ひとりである)は対人的相互作用の欠如で、これは広義のsocial withdrawalの定義「知っている・見知らぬを問わず仲間に対する際のあらゆる形態での孤立行動(solitary behavior)の一貫した表出(Rubin, Burgess, & Coplan, 2002)」とほぼ同義で用いられる。すなわち、仲間と関わらずに一人である行動の背景に、内気さや対人不安などの情動面を伴うかどうかについては言及しない。

“inhibition (抑制)”は慣れない状況における気質的な不安や警戒が現れた行動を指し、乳児やトドラーが示す“引っ込み思案”の原初的姿として位置づけられる。“shyness (内気)”は不慣れた対人的状況での抑制を示す傾向である。内気さとひとりであること(solitude)の組み合わせが狭義のsocial withdrawalであり、一般に用いられる“引っ込み思案”の意味—内気さゆえに人に話しかけたりしない様子—ともほぼ同じであろう。この狭義のsocial withdrawalを、Gazelle (e.g., 2003; 2004)は“anxious solitude”と表現している。

しかしながら、広義の“引っ込み思案”にも狭義の引っ込み思案にも、同じくsocial withdrawalが用いられるなど、研究者間で言葉の使い方が統一されているとは言い難い。同時に、違う言葉を使っても測定に用いる尺度は同じであることもある。

<sup>2</sup> おもに1980年代までのレビューとしてRubin and Asendorpf (1993)、それ以降のレビューとして、Rubin and Coplan (2004)やRubin, Burgess, and Coplan (2002)がある。

表1 引っ込み思案研究で用いられる測定尺度

尺度	項目
CBCL/TRF 「ひきこもり」 下位尺度	「ひとりを好む」「しゃべろうとしない」「内気」「活動的でない」「落ち込んでいる」など
CBS(Ladd & Profilet, 1996) : 攻撃行動、向社会性、非社会性、不安・恐れ、排斥、過活動－妨害の6下位尺度	<非社会性> 「一人で遊ぶことを好む」「一人でいることを好む」「仲間から距離を置く」「ひとりぼっち」「仲間を避ける」「仲間の活動から退く」
CBQ (Rothbartの幼児用気質尺度) の「内気さ」下位尺度	「他の子どもの遊びに加わるよりも見ている方が好きなことが時々ある。」「*他人に会うような場面でも緊張しない。」「*ほとんど誰に対しても、うちとけている。」「知らない人からすごく注目されると恥ずかしがる。」「*初対面の子どもに対して非常に親しく外向的にふるまう。」「*知らない人の中にもすぐに気楽に加わる。」など
CSQ (Crozier, 1995) 自己評定の内気尺度	「新しいクラスに参加するとき緊張してしまう」など
Child Social Preference Scale (CSPS) : Coplanら(2004), 親評定	<内気>「この子は、他の子どもと遊びたい様子だが時々緊張している」「この子は、内気なために他の子どもとのやり取りをあきらめてしまう」など <他者への興味のなさ>「この子は、しばしば一人で遊ぶことに満足しているようだ」「この子は、他の子とグループで遊ぶよりも一人で静かに遊んでいる方が楽しそうだ」など
anxious solitary 児の仲間 指名の項目 : (Avant, Gazelle, & Faldowski, 2011)	「内気でいつも一人で遊んでいる子」「内気で、他の子の遊びを見ているけど、一人で遊んでいる子」「内気で、他の子とあまり話さない子」

そこで、対人相互作用の少ない子どもに関する実証的研究において、具体的にどのように“引っ込み思案”が測定されているのかをみていこう。

親・教師評定による“引っ込み思案”の測定尺度としてよく用いられるのは、子どもの問題行動チェックリストとして広く用いられているCBCL（教師版はTRF）のひきこもり（social withdrawal）尺度（Achenbach, 1991 ; Achenbach & Edelbrock, 1981）と、教師評定による全般的な社会的行動の尺度であるCBS（Ladd & Profilet, 1996）の非社会性（asocial behavior）尺度である。表1に項目を示した。項目を見ると、CBSの非社会性尺度は、上述のsolitude、広義の“引っ込み思案”に該当する内容になっている。CBCLのひきこもり尺度は感情面が含まれており、狭義の引っ込み思案／anxious solitudeをとらえたものになっていると考えられる。

児童期後期以降は親・教師評定の他、仲間指名もよく用いられる方法である（Avant, Gazelle, & Faldowski, 2011 ; Gazelle, 2008）。

一方、内気さの測定においては、年少の子どもに対してはCBQ（Rothbart, Ahadi, & Hershey, 1994）やCCTI（Buss & Plomin, 1984）などの気質尺度の下位尺度が用いられる。児童期後期になるとCSQ（Crozier, 1995）など自己評定の尺度が使われる。

トドラー（1～3歳）や幼児（3～6歳）に対しては、行動観察による抑制や遊び場面の一人行動の定量化も行われている。乳児・トドラーの抑制については、Kochanska (1991) などの手続きにより、初対面の実験者と関わる場面の反応が観察される<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> 初対面の実験者が魅力的なおもちゃなどで遊んでみせる。子どもがおもちゃに興味を示して自発的に近づくか、声をかけられてから近づくか、あるいは誘われても躊躇して近づくかないなどの反応を観察する。子どもの実験者やおもちゃへの接近までの反応潜時や、母親への接触の維持などを数値化する。

幼児の遊びにおける一人的行動は、幼稚園における自由遊びや、実験室で知らない子ども同士数名で一緒に遊ばせている場面について、RubinのPlay Observation Scale (POS) を用いてコーディングされる (e.g., Rubin, Burgess, & Hastings, 2002)。POSでは遊びの社会参加の次元 (何もしていない、傍観、ひとり遊び、並行遊び、会話、集団遊び) と認知的次元 (機能遊び、ごっこ遊び、構成遊び、探索、ルールのあるゲーム) を10秒を1インターバルとしてコーディングする。その組み合わせで、以下の3形態の一人的行動が数量化される。①沈黙 (reticent) 行動: 何もしていない状態 (うろうろする、ぼーっとしている) と傍観 (他児の遊びを見つめる)、②静的／非活動的なひとり遊び (solitary-passive): ひとりでの構成遊び (積み木、お絵かきなど)、ひとりでの探索行動 (静かに何かを観察したり、おもちゃの仕組みを考えるなど)、③動的なひとり遊び (solitary-active): ひとりでの運動機能遊び及びひとりでのごっこ遊び、である。

ここまで“引っ込み思案”の用語と測定方法を概観した。まとめると、“引っ込み思案”は、乳児期の頃は慣れない場面や知らない人のいる場面での抑制行動 (すぐには動き出さない、警戒的な様子) として調べられている。幼児になると、他児との遊びの場面での一人的行動を活動内容によって分類するが、その際、内気さなどの動機・感情面は含まれない。それらは気質尺度などで独立して測定される。児童期は、行動観察よりも周囲 (親、教師、仲間指名) や本人の評定が尺度を用いて行われる。「一人での」行動面と動機的側面 (シャイ、一人好き) を切り離して測定しようとする工夫も見られるが、使われる尺度によっては両者を明確に区別せず、「シャイで一人でいてあまりしゃべらない」という複合的な状態として測定している。

これを踏まえた上で、次に、各年齢について得られた知見を概観する。

### 3. 乳幼児期の“引っ込み思案”：気質、親の関わり、遊び方

縦断研究を中心に概観し、早期の気質的特徴や親の関わり方、それらが幼児期の遊び場面の一人的行動にいかにつながっているのかを検討する。

Fox, Henderson, Rubin, Calkins, & Schmidt (2001) は、4ヶ月から4歳までの縦断研究を行っている。4ヶ月の乳児433名から気質のパターン (実験室で刺激に対する反応を手足の運動及びポジティブ／ネガティブ情動表出の点でコーディング) によってスクリーニングした153名を対象にした。4ヶ月時の気質は、2歳までの行動抑制及び4歳での実験室の見知らぬ仲間との遊び場面の沈黙行動を中程度に予測した。興味深いことに、研究期間を通して一貫して抑制的である群と抑制を減少させていった変化群で、家庭外保育経験の有無を比較したところ、有意な偏りが見られ、変化群は保育経験者が多く、一貫抑制群では保育経験者が少なかった。

この保育経験の有無の差は、抑制的な性質の維持の背景にある親の関わりの問題を暗示するといえる。乳児期の抑制と親の関わりに関して、Rubinら (1997; 2002) の研究がある。2歳の抑制と4歳での非社会的遊びのつながりについて、母子相互作用場面での母親の関わり方との関連で検討している。

Rubin, Hastings, Stewart, Henderson, & Chen (1997) は2歳になって間もないトドラー108名を対象に、Kochanska (1991) の行動抑制観察手続きによる一般的な抑制と、見知ら

ぬ母子と同室での自由遊び場面での対仲間抑制を観察した。一般的抑制、対仲間抑制それぞれを目的変数とした重回帰分析したところ、子どもの気質「恐れ」は両方に対して有意であったが、「恐れ」と母親過干渉の交互作用は対仲間抑制に対してのみ有意で、恐れやすい気質に過干渉な母親の関わりが組み合わせられると、仲間場面での行動抑制につながった。

さらに、これらの2歳時の変数で4歳時の見知らぬ4人組での遊び場面の一人的行動を予測した(Rubin, Burgess, & Hastings, 2002)。一人的行動の3形態(沈黙、静的一人遊び、動的一人遊び)それぞれを目的変数とし、2歳時の抑制(一般、対仲間)、母親行動(過干渉、嘲笑的)及び抑制と母親行動の交互作用を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、2歳の時に仲間場面で抑制的であった子どもが、その時に過干渉や嘲笑的なかわりをする母親を持っていた場合、4歳の遊びで静的一人遊びは少なく、沈黙行動が多いことが明らかになった。

これらの結果から、初期の“引っ込み思案”の出発点として気質特徴があり<sup>4</sup>、それが親の過干渉な関わり方で悪化することが示唆される。Coplan, Prakash, O'Neil, & Armer (2004)も母親の養育態度の影響を見いだしている。彼らは、カナダの3～5歳児約250名(平均4歳)を対象とし、一人的行動の背景としての内気さと対人的興味のなさ、母親の養育スタイルと母親のsocial goal(同じ年の友達を作ることは幼児にとって重要なことだという考え)の評定を行っている。内気さと過保護な養育スタイルの間に正の、対人的興味のなさsocial goalの間に負の関連が示された。

上述の研究(Fox et al., 2001; Rubin, et al., 2002)において、幼児期の遊び場面での沈黙行動がより年少の頃の行動抑制と関連していることが示されているが、一方で、幼児期の遊び場面の一人的行動(沈黙行動、静的な一人遊び、動的な一人遊び)はどのような同時的あるいは予測的な関連をもつのだろうか。

4歳を対象にした研究では(Coplan, Rubin, Fox, Calkins, & Stewart, 1994)、実験室での見知らぬ4人組のいくつかの遊び場面を観察したところ、沈黙行動が多いほど不安行動(指しゃぶりなど)や他児の近くでうろつくことが多かった。また、沈黙行動は自由遊び以外の課題場面(片付け、分類など)のパフォーマンスの低さや心配そうな様子と関連しているが、静的／動的一人遊びにはそのような傾向はなかった。沈黙行動は母親評定の気質「内気さ」と、動的な一人遊びは気質「衝動性」とそれぞれ正の相関を示した。

Nelson, Rubin, & Fox (2005)による4歳から7歳の縦断研究では、163名を対象に4歳時と7歳時で実験室で知らない同士の同性4人組で自由遊び場面の観察を行い、7歳時にはコンピテンスの自己評定も行った。その結果、性別により異なる傾向が示された。男児では、4歳時の遊びと7歳児の遊び及びコンピテンスの間に複数の関連が見られた。すなわち、4歳での沈黙行動が多いと、7歳でも沈黙行動が多く運動コンピテンスは低かった。

<sup>4</sup> 抑制や内気さに関する神経生理学的検討はFoxらによってなされている。複数の研究で、抑制や内気さの高い子どもが脳波(EEG)の左右非対称性を示すことが見いだされている。Fox et al. (1995)では4歳で遊び場面の沈黙行動を示す子どもに右の活性を、反対に高い社会的能力を示す子どもに左の活性を見いだした。Schmidt, Fox, Schulkin, and Gold (1999)は内気な7歳で右の活性を見いだした。また、Fox et al. (2001)の一貫抑制群は9ヶ月の段階で右の活性を示したが、後に抑制的でなくなる変化群の乳児は、このような非対称性を示さなかった。



また、4歳での静的な一人遊びが多いと、7歳での沈黙行動は少なく認知的コンピテンスが高かった。7歳の沈黙行動は同じ時期のコンピテンスのほか観察された仲間からの受容にも、仲間からの受容の自己評定にも、負の相関を示した。女兒においては、4歳と7歳の遊びの間に関連は示されなかった。男女別にコンピテンスと仲間受容の自己評定に対する4歳及び7歳時の遊びの影響を検討したところ、男児では、4歳の静的な一人遊びが多いほど、また7歳の沈黙行動が少ないほど、認知コンピテンスが高かった。4歳と7歳の沈黙行動及び7歳の静的な一人遊びが多いほど、運動コンピテンスが低かった。また、7歳の沈黙行動と静的な一人遊びが多いほど、仲間からの受容感が低かった。女兒では、遊びの種類の影響は示されなかったものの、4歳の遊び場面で観察された仲間からの受容が多いほど7歳の認知コンピテンス及び運動コンピテンスが高かった。

なお、この年齢においても、“引っ込み思案”の持続に対する母親の関わり方の影響が見いだされている。Hane, Cheah, Rubin, & Fox (2008) は、母親がポジティブな関わりをしていない場合、4歳の内気さが7歳での自由遊びの一人行動を予測すること、また、母親のネガティブ関わりが多い場合、4歳での沈黙行動が7歳での自由遊びの一人行動を予測することを示した。

コンピテンスに関しては、Coplan, Gavinski-Molina, Lagacé-Séguin, & Wichmann (2001) の研究もあげられる。彼らはカナダのkindergartenの幼児（日本では年長児にあたる）を対象とし、園での自由遊び場面の一人行動の観察、気質の母親評定、不適応行動や社会的コンピテンスの教師評定に加えて、言葉と数の能力測定および能力に関する教師評定も行った（Coplan et al., 2001）。その結果、内気であるほど沈黙行動が多く、沈黙行動が多いほど社会的コンピテンス、学力、外向型不適応の傾向は低かった。感情制御がよいほど静的な一人遊びは多かった。女兒では、内気ではないほど静的な一人遊びが多く、静的な一人遊びが多いほど学力が高かった。対照的に男児では、静的な一人遊びが多いほど社会的コンピテンスも学力も低かった。動的な一人遊びを示す子どもはそうでない子どもに比べて感情制御が悪く、また社会コンピテンスも内向型不適応も低かった。女兒で動的な一人遊びを示す子どもは外向型不適応が高かった。

ここまで概観した幼児期の遊び場面の一人行動に関する結果を以下にまとめる。

①**沈黙行動**：幼児期のどの年齢でも一貫して内気と相関するほか、年長になると認知的課題のパフォーマンス、社会的コンピテンスや学力と負の相関を示すなど、沈黙行動は内気さと無力さを併せ持ちやすいといえる。

②**静的な一人遊び**：これは年齢と性別によって、プラス面とマイナス面を示した。男児では、4歳時の静的な一人遊びは7歳時の認知コンピテンスに正の相関を示した一方で、5歳半の男児では静的な一人遊びを示すほど社会的コンピテンスや学力が低い。また、7歳時の静的な一人遊びは、コンピテンスや仲間からの受容感と負の相関を示すなど、低年齢では適応的な要素をもっているが、数歳分、年長になると、不適応へと転じる。一方、女兒では5歳半の静的な一人遊びは学力に正の相関を示していた。

③**動的な一人遊び**：4歳では衝動性と、5歳半では感情制御のまずさと関連し社会的コンピテンスと負の相関を示した。5歳半の女兒では、外向型問題と正の相関があった。なお、大内・櫻井（2008）の縦断研究では、男児では入園当初（4歳半）の動的な一人遊びがその後の主張スキルに負の相関、女兒では入園後半年時点での動的な一人遊びが翌年度

末の不注意多動傾向と攻撃性に負の相関を示した。

幼児期の遊びの観点で考察すると、製作など集中した一人遊びは、年齢的にふさわしい時期がある。しかし協同的な遊びが年齢に適した姿となる年長児になると、非社会性の兆候として負の作用をもつ。うろうろしたり、ぼーっとしたり、他児が遊ぶのを見ているだけの状態は、気質的な内気さを背景としていて、低年齢の頃から一貫して不適応のサインとなりうる。一人で意味もなく走り回っていたり、ジャングルジムをずっと上ったり降りたりしていたりする姿は、衝動性など制御の問題との関連が示唆され、内気さゆえに集団参加が少ない典型的な引っ込み思案とは異なる発達上の兆候を示すのかもしれない。

ここまで述べた研究で見いだされた性差は、おおむね男児により不利な方向で示されている。Rubin, Burgess, & Coplan (2002) においても、“引っ込み思案”の産物において見られる性差は、男児が不利であることが多いと述べられている。親は内気な娘よりも内気な息子を受け入れがたく、結果として内気な男児は親とよりネガティブなやり取りを経験しやすいとされる。気質的な恐れを発達初期の背景とする“引っ込み思案”と不適応との関連において男児に不利な性差が示されるというのは、周囲の見方が関連することの証左である<sup>5</sup>。この周囲の見方の影響については、後で検討する。

次に、長期間の縦断研究の結果から、乳幼児期の“引っ込み思案”がその後どの程度継続するのかについてみていく。

#### 4. 乳幼児期から小学校6年生までの長期間の縦断研究

アメリカのNational Institute of Child and Human Development (NICHD) の長期追跡データを用いた約1000名の乳幼児期から小学校6年生までの“引っ込み思案”の変化を初期の養育、アタッチメント、気質から予測した研究がある (Booth-LaForce & Oxford, 2008)。

“引っ込み思案”はTRFのひきこもり尺度により小1から小6まで毎年測定した。乳幼児期のデータは、6ヶ月時にはじまる様々な時点で気質、母子相互作用観察での母親の感受性、アタッチメントなどを分析に使用した。小1から小6までの毎年のひきこもり得点から、成長曲線分析により3グループを得た。1つは低め安定のノーマル群 (86%)、2つめは、学年を追うごとに増加する群 (9%)、3つめは、減少する群 (5%) であった。特筆すべきはひきこもり得点が一貫して高い群が見いだされなかったことである。ただし、増加群も減少群も、その一番得点の低い時期においても、ノーマル群よりはひきこもり得点は高かったため、ひきこもり得点の増減はあったとしても“ノーマル”群よりは常に引っ込み思案な性質を有している。構造方程式モデリングにより、幼児期の内気さが減少群を特徴づけ、幼児期の抑制的制御の悪さが、増加群を特徴づけていることが示された。また、両方の群に共通して、乳児期の気質、乳児期及び幼児期の感受性の低い親の接し方が背景要因となっている。

<sup>5</sup> 本稿ではおもに北米の研究をレビューし文化差については言及していないが、Rubin and Coplan (2004) が紹介しているように、Chenらによる中国の子どもを対象にした“引っ込み思案”の研究や (Chen, Li, Li, Li, & Liu, 2000)、中国と北米の子どもの比較文化研究も行われている (Cheah & Rubin, 2004; Chen et al., 1998)。



Ladd (2006) は、399名を対象に年長から小学校6年生までの毎年、TRFやCBSの教師評定を中心に、“引っ込み思案”、仲間からの排斥、攻撃性、外向・内向型問題行動を測定した。“引っ込み思案”の尺度として、TRFひきこもり尺度とCBSの非社会性尺度を用いた。仲間からの排斥の測定には、CBSの排斥尺度にくわえ、受容と排斥の仲間指名も用いた。この研究の目的は、攻撃性や引っ込み思案が不適応問題傾向につながるのか（モデル1）、それとも不適応問題傾向が攻撃性／引っ込み思案といった行動特徴につながるのか（モデル2）、あるいは、発達にしたがってどちらが先行するかが途中で逆転するのか（モデル3）を明らかにすることである。モデル1では、攻撃性／引っ込み思案の特徴に仲間からの排斥が加算されて不適応へと至るプロセスを想定し、モデル2では不適応特徴が仲間からの排斥及び行動特徴（攻撃性／引っ込み思案）へとつながるプロセスを想定している。分析の結果、モデル1が妥当であることが見いだされた。

モデル1の詳細な結果として、前年の引っ込み思案と仲間からの排斥から内向型不適応へ年長から小6まで繰り返し描かれるパスのうち、仲間からの排斥は不適応を小1から小6まで繰り返し予測していたのに対して、引っ込み思案さは3年生以降にならないと翌年の不適応を予測しなかった。しかもその係数は排斥に比べて小さい。攻撃と仲間からの排斥から外向型不適応問題へのつながりのモデル上では、全てのパスが有意であり、しかも攻撃性から外向型不適応問題へのパスはすべて高い数値を示したものと比べると、引っ込み思案の結果は対照的である。また、攻撃性と引っ込み思案の幼稚園から小6までの1年ごとの安定性の係数は、攻撃性においては一貫して非常に高いが、引っ込み思案は低年齢のうちは弱いあるいは中程度であったものが、より年齢が上がるにしたがって比較的高い数値となった。

ところで、この研究では引っ込み思案と仲間からの排斥の関連については言及されていないが、Gazelle & Ladd (2003) が、ほぼ同じサンプルと思われる年長から小学校4年生までのデータを分析している。引っ込み思案（TRFひきこもり尺度とCBS asocial尺度から抜粋した8項目で測定）と排斥の相関は、年長の学年開始時、学年末ともに.30弱、1年生、2年生ともに.36、3年生で.39、4年生で.50であった。年齢が上がるにしたがって、引っ込み思案は仲間からの排斥と明確に関連するようになるといえる。

まとめると、①引っ込み思案は攻撃性よりは安定していない。特に低年齢のうちは不安定である。②攻撃性が低年齢の頃から外向型の不適応に直結するのに対して、引っ込み思案は低年齢ではうつや不安などの内向型の不適応に結びつかないし、児童期後半にそれを予測するようになるが、仲間からの排斥の方が不適応へのつながりは明確である。③低年齢でも引っ込み思案と仲間からの排斥は関連を示し、年齢が上がるにしたがってその関連性は強いものになる。

低年齢のうちは、気質的に強く感じやすい恐れに対するコントロールが、親のかかわり方のまずさによって身につかずにいることや、人への興味が育っていないなどにより、同年齢集団のなかで社会参加へのスタートが出遅れ、その結果として“引っ込み思案”な姿を呈するのかもしれない。園や学校で、望むと望まざるとに関わらず様々な対人的相互作用の場面を経験しながら、“引っ込み思案”な特徴を弱めていく子どもや、あるいは特徴はそのままにしながらうまく仲間集団に適応していく子どもの存在が、長期の縦断研究の結果から示唆される。それでは、どのような要因が“引っ込み思案”の維持、あるいは“引

込み思案”から不適応へのつながりに対して、促進／防御的に働いているのかを、以下に検討する。

## 5. 児童期：周囲の要因がどう影響するか

### (1) クラスの情緒的雰囲気

Gazelle (2006) もNICHDのデータ(約1300人)を用いて、幼児期の引っ込み思案(TRFのひきこもり尺度で測定)と小1のクラスの情緒的雰囲気、教師評定による年長と小1の時の仲間からの受容と排斥を分析した。教室での観察によりクラスの情緒的雰囲気と仲間によるからかいがコーディングされた。予想されたとおり、幼児期に引っ込み思案の経歴を持つ子どもは、1年生で情緒的雰囲気が好ましくないクラスでは、より拒否され、男児では受容されず、女児ではからかいのターゲットにされ、うつ兆候を示した。Avant et al. (2011) もクラスの雰囲気と学年の始めと終わりの引っ込み思案や排斥をソシオメトリで検討している。

### (2) 教師はどう評価しているか

内気な児童に対する教師の見方のバイアスが、研究から示唆されている。9～13歳の児童125名を対象に内気さと学業成績との関連した研究では、非言語IQを統制すると、内気さと客観テスト(読解と算数)の間に相関は無かったが、内気さと学力の教師評定の間には負の相関が示された(Hughes & Coplan, 2010)。すなわち、教師は内気な児童を彼らの実力よりも低く評価していることが示唆される。

また、Coplan, Hughes, Bosacki, & Rose-Krasnor (2011) は、小学校教師275名に対して内気な児童、おしゃべりな児童、普通の児童を記述した文章<sup>6</sup>を提示し、それらの仮想的児童に対する評価を尋ねた。同時に教師自身の内気さについても評定を求めた。その結果、自身が内気な教師は、内気な児童、おしゃべりな児童、普通の児童への評価に違いはないが、内気さが平均的な教師や社交的な教師は、内気な児童を他の児童よりも能力が低いと評価した。

### (3) 児童の見方

#### ①仮想的“引っ込み思案”児への児童の評価

Coplan et al. (2007) は、6歳児(年長と1年生計137名)を対象に“引っ込み思案”のサブカテゴリーとしての“内気さ”と“非社会性”に対する認知と解釈を、仮想場面を用いて検討した。彼らは内気な子どもの記述文として「この子は、他の子に話しかけるのがこわいと感じている (be afraid to talk)。友達が遊んでいるとき、その様子を見ています」、非社会的な子どもの記述文として「この子は一人で遊ぶのが好きな子です (likes to play on his own)。他の子が遊んでいるとき、一人で遊んでいます」と提示した。この架空の子どもに関して、意図的にその行動をしているのか、他児と関わろうという動機はあるのかといった点の解釈を求め、また、その子どもへの好意や同情などを尋ねた。その結果、どの

<sup>6</sup> 内気／寡黙 児の説明文 アダムはクラスで自分から話をしない。特に対人的な状況で、しばしば緊張し、ためらいがちである。あなた(教師)が彼に直接質問しても、彼は目を合わせず、ささやき声で答えるか、まったく返事をしない。彼は人から注目されることが苦手な他の児童とグループで活動するときもほとんど参加しない。

質問への回答についても“内気さ”と“非社会性”の間に有意差が示され、6歳児は“内気さ”を“非社会性”よりも肯定的にとらえていた。

藤岡・渡辺（2011）は、90名の幼児（年中・年長）を対象に、仲間入り、あいさつ、応答、他者の困窮場面などにおける3種類の“引っ込み思案”反応（働きかけに対して消極的に反応するもの、躊躇するもの、無反応）を示す仮想的幼児を提示し、その人物への受容度を尋ねた。消極的な反応に対する幼児の受容度は、すべての場面において高かったものの、年齢が上がるにつれて受容度は減少する傾向が示された。躊躇や無反応に対する受容度は、場面や年齢及び性により異なっていた。要求に対する応答場面や援助場面で示される躊躇や無反応は、受容されにくく、また、年中より年長、男児より女児の受容度が低い場合があった。これらの結果から、自分から集団参加しない他者に対する幼児の評価は、利害のないやりとりの場面での消極的反応に対しては否定的ではないが、明確な応答や援助行動が期待される場面においてそれを示さない場合に否定的になることが示唆された。

## ② “引っ込み思案”児への仲間からの排斥

Gazelle（2008）は、内気で一人でいる引っ込み思案を他の特徴、すなわち、協力的で優しいなど積極性以外の向社会性特徴、注意引きをするなどの社会的に未熟な特徴、いやなことを言ったり嘘をつくなどのいじわるな特徴によってサブタイプ化し、それぞれのサブタイプの適応上の差異を検討した。3年生を対象に学年はじめと学年末に仲間指名により上記の特徴を測定した。さらに、肯定的指名（好きな子）と否定的指名（好きじゃない子）、仲間から排除されている子、いじめターゲットの子、自分を守れない子、頭がいい子、おもしろい子、リーダー的な子、及び親友を指名させた。被指名に基づいて「優しい引っ込み思案児」「未熟な引っ込み思案児」「意地悪な引っ込み思案児」「普通の引っ込み思案児」を比較したところ、「優しい引っ込み思案児」は他の3群に比べて適応的であったが、他の3群は学年はじめから学年末にかけて仲間からの排斥を増加させていった。性別による差もあり、男児の方が不利であった。

以上の複数の研究結果から、積極性に欠けることが必ずしも仲間からの否定的な見方につながるわけではなく、積極性以外の向社会性を備えていることが“適応的な引っ込み思案”を成立させるといえる。

## 6. まとめ：引っ込み思案に対する家庭や園・学校における周囲のかかわり

すでに述べたように、発達初期に恐れ的气质特徴を持つ子どもに対して、養育者が過干渉なかかわりをするのが、トドラー期の抑制につながる。養育者の過干渉な関わりは、子どもが自力で小さな困難を克服する経験の機会を奪うことになる。そのような経験の欠如により、慣れない場面や新たな人との出会いの中で生じる恐れをコントロールする力が身につかないまま、幼稚園や保育園などの集団生活を迎えると、なすすべもなく自由遊びの時間にうろうろしたりぼーっとしたりすることになると考えられる。数井（2012）はアタッチメント（愛着）について論じる中で、子どもは安心できて初めて外界への探索システムや社交システムを働かせることが可能になると述べている。したがって、“安心の基地”を持たず恐れが活性化した状態のまま、遊ぶことは難しい。

Fox et al. (2001) で、4 ヶ月から4 歳の間に抑制的行動特徴を減少させた群は、一貫して抑制的であった群に比べて家庭外保育の経験者が多かったことが示されたが、このことは、家庭以外の大人との関わりの中で“安心の基地”を持てたり、恐れのコントロールを獲得できたことで、抑制性が減少したという解釈もできる。乳幼児期の行動ベースの養育者とのアタッチメント関係は、やがてアタッチメント表象となるが、児童期にアタッチメント表象が安定的である場合に、引っ込み思案からうつ傾向へのつながりが緩和されることが示されていることから（Gullone, Ollendick, & King, 2006）、引っ込み思案を適応の観点で考察する際に、児童期を通じて養育者の影響は無視できない。しかし、上述のように家庭外の大人との関わりも重要である。

特に幼稚園・保育園において、子どもが遊ぶ場を作る保育者の役割は、幼児期の引っ込み思案の克服において重要である。

遊びを見つけられない状態の子どもに対して、子ども本人が楽しめ集中できる遊びを見つけれられるようにするための保育者の役割は、まず、子どもに安心の状態をサポートすることであるといえる。保育者自身の存在が子どもにとっての“安心の基地”になることや、落ち着ける場作りなどが考えられる。その上で、子どもの興味を見取り、遊びの素材や場を提供して、子どもが自分で「遊べる」ようにサポートする。実際に保育の実践を見ると、自由遊びの時間に一人ではやっとうろうろしている子どもが、保育者の継続的な見取りと働きかけによって自分で「遊べる」ようになると、遊びを介して友だちとのつながりも出てくる事例が見受けられる。もちろん、友だちとのかかわりへの一歩が踏み出せない子どもに対して、スキル教示的に後押しすることも重要であるが、「一人である」事のみを問題視して、他児と遊ばせることにだけ目を向けることは、逆効果になる危険性もあると思われる。一人遊びであっても、何かに興味を持って集中した取り組みから、子どもは様々なコンピテンスを育てる。ただし、幼児期でも年長となると、協同的な活動に取り組めることが求められる。したがって、集中した遊びだとしても一人遊びしかしていない状態は、その後の適応の観点で望ましくない。この点での保育者の配慮も必要である。

小学校に入学後、幼児期の引っ込み思案さがそのまま安定的に継続されるわけではないことは、前述の通り縦断的研究の結果で示されている。情緒的雰囲気の良いクラスでは、幼児期に引っ込み思案特徴を持っていた子どもが、その特徴と仲間からの排斥を結びつけることがなかったという結果は（Gazelle, 2006）、非常に示唆的である。子どもは年齢が上がるにつれて、“引っ込み思案”に対して否定的な見方をするようになるし、実際に学年が上であるほど、引っ込み思案さと仲間からの排斥に強いつながりが生じる。引っ込み思案さに仲間からの排斥が加わったときに、内向型の不適応問題を抱えることになる。したがって、クラスの情緒的雰囲気を良い状態にすることは、容易ではないが、きわめて重要で効果的なことであるといえる。

## 文 献

- Achenbach, T. M. (1991). *Manual for the Teacher's Report Form and 1991 Profile*. Burlington: University of Vermont, Department of Psychiatry.
- Achenbach, T. M., & Edelbrock, C. S. (1981). Behavioral problems and competencies reported by parents of normal and disturbed children aged four through sixteen. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 46(1, Sereal No. 188) .
- Avant, T. S., Gazelle, H., & Faldowski, R. (2011). Classroom emotional climate as a moderator of anxious solitary children's longitudinal risk for peer exclusion: a child x environment model. [Research Support, N.I.H., Extramural]. *Developmental Psychology*, 47(6), 1711-1727.
- Booth-LaForce, C., & Oxford, M. L. (2008). Trajectories of social withdrawal from grades 1 to 6: prediction from early parenting, attachment, and temperament. *Developmental Psychology*, 44(5), 1298-1313.
- Buss, A. H., & Plomin, R. (1984) . *Temperament: Early developing personality traits*. NJ: Erlbaum: Hillsdale.
- Cheah, C., & Rubin, K. (2004). European American and Mainland Chinese mothers' responses to aggression and social withdrawal in preschoolers. *International Journal of Behavioral Development*, 28(1), 83-94.
- Chen, X. Y., Hastings, P. D., Rubin, K. H., Chen, H. C., Cen, G. Z., & Stewart, S. L. (1998) . Child-rearing attitudes and behavioral inhibition in Chinese and Canadian toddlers: A cross-cultural study. *Developmental Psychology*, 34(4), 677-686.
- Chen, X. Y., Li, D., Li, Z. Y., Li, B. S., & Liu, M. W. (2000). Sociable and prosocial dimensions of social competence in Chinese children: Common and unique contributions to social, academic, and psychological adjustment. *Developmental Psychology*, 36(3), 302-314.
- 千葉紀子・藤岡久美子 (2009). 自由遊び場面における幼児の仲間との相互作用－相互作用の少ない子どもの行動及び認知的特徴－ 山形大学教職・教育実践研究 4, 51-60.
- Coplan, R. J., Gavinski-Molina, M. H., Lagacé-Séguin, D. G., & Wichmann, C. (2001). When girls versus boys play alone: Nonsocial play and adjustment in kindergarten. *Developmental Psychology*, 37(4), 464-474.
- Coplan, R. J., Girardi, A., Findlay, L. C., & Frohlick, S. L. (2007) . Understanding Solitude: Young Children's Attitudes and Responses Toward Hypothetical Socially Withdrawn Peers. *Social Development*, 16(3), 390-409.
- Coplan, R. J., Hughes, K., Bosacki, S., & Rose-Krasnor, L. (2011). Is silence golden? Elementary school teachers' strategies and beliefs regarding hypothetical shy/quiet and exuberant/talkative children. *Journal of Educational Psychology*, 103(4), 939-951.
- Coplan, R. J., Prakash, K., O'Neil, K., & Armer, M. (2004). Do you "want" to play?



- Distinguishing between conflicted shyness and social disinterest in early childhood. [Research Support, Non-U.S. Gov't]. *Developmental Psychology*, 40(2), 244-258.
- Coplan, R. J., Rubin, K. H., Fox, N. A., Calkins, S. D., & Stewart, S. L. (1994). Being alone, playing alone, and acting alone: distinguishing among reticence and passive and active solitude in young children. *Child Development*, 65(1), 129-137.
- Crozier, W. R. (1995). Shyness and self-esteem in middle childhood. *British Journal of Educational Psychology*, 65(1), 85-95.
- Fox, N. A., Henderson, H. A., Rubin, K. H., Calkins, S. D., & Schmidt, L. A. (2001). Continuity and discontinuity of behavioral inhibition and exuberance: psychophysiological and behavioral influences across the first four years of life. *Child Development*, 72(1), 1-21.
- Fox, N. A., Rubin, K. H., Calkins, S. D., Marshall, T. R., Coplan, R. J., Porges, S. W., . . . Stewart, S. (1995). Frontal activation asymmetry and social competence at four years of age. *Child Development*, 66(6), 1770-1784.
- 藤岡久美子・渡辺 梢 (2011). 引っ込み思案行動に対する幼児の認知－仮想場面による検討－山形大学教職・教育実践研究 6, 19-26.
- Gazelle, H. (2006). Class climate moderates peer relations and emotional adjustment in children with an early history of anxious solitude: a Child X Environment model. [Research Support, N.I.H., Extramural]. *Developmental Psychology*, 42(6), 1179-1192.
- Gazelle, H. (2008). Behavioral profiles of anxious solitary children and heterogeneity in peer relations. [Research Support, N.I.H., Extramural]. *Developmental Psychology*, 44(6), 1604-1624.
- Gazelle, H., & Ladd, G. W. (2003). Anxious solitude and peer exclusion: A diathesis-stress model of internalizing trajectories in childhood. *Child Development*, 74(1), 257-278.
- Gullone, E., Ollendick, T. H., & King, N. J. (2006). The Role of Attachment Representation in the Relationship Between Depressive Symptomatology and Social Withdrawal in Middle Childhood. *Journal of Child and Family Studies*, 15(3), 263-277.
- Hane, A. A., Cheah, C., Rubin, K. H., & Fox, N. A. (2008). The Role of Maternal Behavior in the Relation between Shyness and Social Reticence in Early Childhood and Social Withdrawal in Middle Childhood. *Social Development*, 17(4), 795-811.
- Hartup, W. W. (1970). Peer interaction and social organization. In P. H. Mussen (Ed.), *Carmichael's manual of child psychology* (Vol. 2, pp. 361-456). New York: Wiley.
- Hughes, K., & Coplan, R. J. (2010). Exploring processes linking shyness and academic achievement in childhood. *School Psychology Quarterly*, 25(4), 213-222.
- 数井みゆき (2012). アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告 誠信書房
- Kochanska, G. (1991). Patterns of inhibition to the unfamiliar in children of normal and affectively ill mothers. *Child Development*, 62(1), 250-263.
- Ladd, G. W. (2006). Peer rejection, aggressive or withdrawn behavior, and psychological

- maladjustment from ages 5 to 12: An examination of four predictive models. *Child Development*, 77(4), 822-846.
- Ladd, G. W., & Profilet, S. M. (1996). The Child Behavior Scale: A teacher-report measure of young children's aggressive, withdrawn, and prosocial behaviors. *Developmental Psychology*, 32(6), 1008-1024.
- Nelson, L. J., Rubin, K. H., & Fox, N. A. (2005). Social withdrawal, observed peer acceptance, and the development of self-perceptions in children ages 4 to 7 years. *Early Childhood Research Quarterly*, 20(2), 185-200.
- 大内晶子・櫻井茂男 (2008) 幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討 教育心理学研究 56, 376-388.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., & Hershey, K. L. (1994). Temperament and social behavior in childhood. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40(1), 21-39.
- Rubin, K. H., & Asendorpf, J. B. (1993). *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood*. NJ: Erlbaum: Hillsdale.
- Rubin, K. H., Burgess, K. B., & Coplan, R. J. (2002). Social withdrawal and shyness. In P. K. Smith & C. H. Hart (Eds.), *Blackwell Handbook of Childhood Social Development* (pp. 329-352.): Blackwell.
- Rubin, K. H., Burgess, K. B., & Hastings, P. D. (2002). Stability and social-behavioral consequences of toddlers' inhibited temperament and parenting behaviors. *Child Development*, 73(2), 483-495.
- Rubin, K. H., & Coplan, R. J. (2004). Paying attention to and not neglecting social withdrawal and social isolation. *Merrill-Palmer Quarterly-Journal of Developmental Psychology*, 50(4), 506-534.
- Rubin, K. H., Hastings, P. D., Stewart, S. L., Henderson, H. A., & Chen, X. (1997). The consistency and concomitants of inhibition: some of the children, all of the time. *Child Development*, 68(3), 467-483.
- Schmidt, L. A., Fox, N. A., Schulkin, J., & Gold, P. W. (1999). Behavioral and psychophysiological correlates of self-presentation in temperamentally shy children. *Developmental Psychobiology*, 35(2), 119-135.

## Summary

Kumiko Fujioka :  
Social withdrawal in childhood

This article outlined the current status of empirical studies related to children's social withdrawal. Nomenclature of social withdrawal was first outlined, describing measures of social withdrawal and relatives. Longitudinal studies through entire childhood were reviewed to consider developmental trajectories of social withdrawal and factors which moderate the relationships between social withdrawal and internalizing behavior problem. Finally, suggestions for education were offered.